

教 育

白衣授与式を実施しました。

2019年1月11日、さくら講堂にて、2018年度白衣授与式およびStudent Doctor認定証授与式が行われました。

当日は、医学部同窓会「瑞友会」の山本喜通会長、小椋祐一郎病院長、飛田秀樹医学副研究科長、杉浦真弓カリキュラム企画・運営委員長、服部友紀総合研修センター副センター長が出席し、間もなく臨床実習を開始する医学部新5年生102名に、白衣とStudent Doctor認定証を授与しました。

この日授与された白衣は瑞友会から寄贈されたもので、同窓会のロゴ(ハートのマーク)と学生の氏名が刺繍された特別仕様。学生を前にした山本先生は「白衣授与式では、同窓会のマークが入った白衣を贈るのが伝統。これまで先輩たちがしてきたように、責任感を持って実習に臨んでください」と激励の言葉を送りました。

真新しい白衣を受け取った学生たちは、さすがに感慨深げな面持ち。代表として決意表明をした学年代表・萩原睦さんは、臨床実習に臨む気概を語るとともに、「これからよろしくご指導ください」と、教員への謝辞を述べていました。

白衣とStudent Doctor認定証を授与された学生たちは、同月15日より附属病院等における臨床実習をスタートさせました。今後は診療チームの一員として患者さんと接しながら、実際の医療現場において知識、技能、態度を磨いていくこととなります。伝統の白衣に身を包み、医療人としての第一歩を踏み出した医学部新5年生たち。彼らのため、我々教職員もより良い教育、より良い学びの場を提供できるよう、努力していきたいと思ひます。



山本会長と学年代表・萩原さん



最後は皆で記念撮影

研 究

「医学生・研修医等をサポートするための会」を開催しました!

愛知県医師会が男女共同参画の一環として主催する「医学生・研修医等をサポートするための会」が2019年2月6日、本学で開催されました。本会は、愛知県内の医学部4大学が順番で開催校となるもので、今年の当番校が名市大です!そこで、卒前・卒後教育に関わる人材育成を目的として昨年設立された医療人育成推進センターが企画・運営を担当しました。

懸念していた出席者数ですが、60名と会場はほぼ満席となり、M2からM6まで幅広い学年の学生と研修医の先生方が参加してくれました。今回のメインテーマは、「女性医局長からみた医師のキャリア&ライフプラン」。愛知県医師会長の柵木先生、本学研究科長の道川先生のご挨拶ののち、3名の医局長からご講演いただきました。皮膚科・西田絵美先生「ダイバーシティ&キャリアプラン」、小児科・服部文子先生「50歳のとき、どんな顔になりたいですか?卒後20年で考えること」、眼科・加藤亜紀先生「家庭の数だけ答えがある~医師のキャリア&ライフプラン~」とタイトルだけでも魅力的な内容であったことを想像いただけたと思います。女性医師を中心としたキャリア形成の具体例や、将来像、専攻医の過ごし方、座右の銘など、ご自身、そして医局長としてのお立場から踏み込んだ、普段の学会・研究会とは全く異なった発表となりました。座談会のセッションでは、予定していた(?)質問以外にも、学生、研修医のみなさんから将来についての質問をいただき、活発な会となりました。

サクラサイドテラスでの懇親会もノンアルコールの環境ながら、大いに盛り上がりました!女性のみならず男性の医学生、研修医のみなさんが具体的に将来を考える良いきっかけになったのではないかと思います。若い人々が未来へ大きく飛躍されることを期待しています。



道川研究科長からのご挨拶



活発な質疑応答が交わされました

文責:医療人育成推進センター 安井 孝周

研 究

再生医療に関する協定締結記念特別講座  
『もっと身近になる夢の医療~患者さんに届く「再生医療」の今~』を開催

平成31年2月4日(月)午後6時30分から、名古屋市立大学病院大ホールに於いて、市民や医療関係者など約100名が参加し、再生医療に関する特別講座を開催いたしました。

この特別講座は、平成30年7月に名古屋市立大学と蒲郡市との間で取り交わされた「再生医療の実施における相互協力に関する協定書」の締結を記念して行われたものです。

蒲郡市には医療用の細胞培養製品を開発・製造している企業(ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング:J-TEC)があり、蒲郡再生医療産業化推進委員会を設置するなど市全体で再生医療のまちづくりに取り組んでいます。一方、名古屋市立大学病院では、形成外科と皮膚科による「白斑、改善が困難な瘢痕、難治性潰瘍に対する培養表皮移植の有効性の検討」など再生医療による臨床研究がいくつか実施されています。

夢の医療として期待されている再生医療も、私たちに身近な医療へと近づいてきています。郡健二郎理事長の開会あいさつ後、医師や企業それぞれの立場より開発から治療にいたる最新報告や蒲郡市の取り組みなどについて、鳥山和宏形成外科部長、飯島伸幸蒲郡市企画部長、島賢一郎J-TEC代表取締役及び私による基調講演が行われました。また、森田明理副病院長を座長に、鳥山氏、島氏、私をパネリストとしたパネルディスカッションを行い、再生医療の将来展望について語られました。

閉会にあたっては、城卓志蒲郡市民病院CEOから名古屋市立大学病院と蒲郡市・蒲郡市民病院との連携により、より一層の再生医療の進展を図ってきたいとのあいさつがありました。

今後も蒲郡市民病院との共同研究や、市民を対象とした再生医療シンポジウムの共同開催などにより、再生医療の実用化と研究の活性化を通じて医学の進歩や社会貢献につなげていくことが本学の大きな使命の一つであると考えます。



パネルディスカッションの様子

文責:臨床研究開発支援センター長 神谷 武

研 究

「慢性疼痛に対する集学的アプローチの実際  
—心理療法、理学療法をとりいれた多職種実践ワークショップ」の開催について

2019年2月9日に「慢性疼痛に対する集学的アプローチの実際」と題し、講演会とグループワークを開催しました。本イベントは、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」、厚生労働省「慢性疼痛診療体制構築モデル事業」の一環として本学が主催したもので、名古屋市からも後援をいただきました。当日は、本学の郡理事長と名古屋市病院局の大原局長からのご挨拶がありました。

日本人の約15%以上が抱えているとされる「慢性疼痛」では、生物-心理-社会的要因が複雑に関与する機会が多いとされます。そのため、複数の診療科の医師や看護師、理学療法士、臨床心理士など多職種で診療にあたる「集学的アプローチ」が有効とされています。前半では、当院いたみセンター長の杉浦教授、副センター長/精神科の近藤特任助教、吉戸理学療法士、酒井臨床心理士より、各職種の視点からの評価と治療の重要性について講演がありました。後半のグループワークでは、参加者に職種別に分かれて「即席の多職種チーム」を作っていたいただき、実際のカンファレンスさながら、架空症例に対して評価と治療方針を検討し、集学的アプローチの実際を体験していただきました。ファシリテーターには、当院いたみセンターのスタッフを始め、日本大学医学部附属板橋病院痛みセンターの看護師、薬剤師、作業療法士の方にもご協力いただきました。

当日は、医療関係者を中心に、講演会には62名、グループワークには30名と多くの方にご参加いただき、大変活発な議論も交わされました。本イベントを通して、一人でも多くの方が慢性疼痛の多職種アプローチにご関心をお持ちになり、そのことで慢性疼痛を抱える方の生きる力を支える一助となったならば幸いです。なお、このような研修として「名市大 医療・保健 学びなおし講座」より「チームで取り組む慢性疼痛」の講義を今年度も開催しております。



講演会の様子



グループワークの様子

名古屋市立大学大学院医学研究科 精神・認知・行動医学 臨床心理士 酒井 美枝  
名古屋市立大学病院 いたみセンター長 杉浦 健之